

2017年8月22日

夏、言葉の力について思う

九州工業大学学長 尾家祐二

異常気象の影響か、各地で、これまでにない集中豪雨が発生しました。特に、九州北部豪雨災害では広範囲に亘る多大な被害が報告されました。犠牲となられました方々に衷心よりご冥福を申し上げますとともに、被害に遭われました皆様にこころよりお見舞い申し上げます。

今年の夏、九州でも、暑い日が続きました。その中、本学では高校生の皆さん向けにオープンキャンパスを行いました。飯塚市の情報工学部は、7月15日～16日に、北九州市の工学部は、8月4日～5日に開催し、合計で5,154名もの高校生の皆さんならびに保護者の方々にお越し頂きました。実際に本学を訪れて頂き、感じ、知って頂く機会になりましたら幸いです。誠にありがとうございました。

また、この夏も、多くのセミの鳴き声を耳にし、より一層の暑さを感じました。ただし、松尾芭蕉の「閑さや岩にしみ入る蝉の声」では、その鳴き声も涼しげに感じます。山形県の立石寺で詠んだ作だと聞きます。昨年、その立石寺（山寺とも呼ばれています）に行く機会がありました。なんと、1000段の石段を昇らないといけません。麓に立つと、ちょっと躊躇してしまいそうでした。しかし、山頂までの間、ずっと丁寧にご案内をしてくださった方のお陰で、楽しい時間を過ごすことができました。その方の人柄もさることながら、改めて、言葉、会話の力を感じました。

少し時代を遡りますが、話すことの大切さを、福沢諭吉は、その著「学問のすゝめ」第12編「演説の法を勧むるの説」で述べています。冒頭、「演説とは英語にてスピーチと言ひ、大勢の人を会して説を述べ、席上にてわが思うところを人に伝うるの法なり。わが国には古よりその法あるを聞かず」で始まり、自らの考えを述べ、即席で思ったことを話し伝えることの大切さを述べています。そして、さらに「学問の本趣意は読書のみならずして、精神の働きにあり」と指摘し、学ぶということが「すなわち視察、推究、読書はもって智見を集め、談話はもって智見を交易し、著書、演説はもって智見を散ずるの術」であり、学びは、自分の中だけで閉じたものではなく、他者との交流が必要であると説いています。なお、視察は *observation*、推究は *reasoning* の訳です。*reasoning* は何らかの判断のための慎重な一連の思考を示しますが、最近では、第4次産業革命と呼ばれる時代において、*logical reasoning*（論理的推論）や *mathematical reasoning*（数学的推論）の能力が特に重要

視されています。ただ、我が国の教育のなかで、明治以降今日までに、どれほど話すことに関心が寄せられてきたでしょうか。

さて、言葉の力について、思い出すことは数多くありますが、中でも、ヘレン・ケラーの自伝における2つのシーンは印象的です。1つ目は、「この時はじめて、w-a-t-e-rが、私の手の上流れ落ちる、このすてきな冷たいものことだとわかったのだ。この『生きていくことば』のおかげで、私の魂は目覚め、光と希望と喜びを手にし、牢獄から解放されたのだ！」（ヘレン・ケラー著「奇跡の人 ヘレン・ケラー自伝」（新潮文庫））です。とても感動的で、多くの方が覚えていらっしゃると思います。2つ目は、言葉を話すことができた瞬間のシーンです。「私の呼びかけに答えて、妹のミルドレッドが走ってきてくれた時、犬が私の命令に従った時、どんなにうれしかったかー。・・・通訳を必要としない、『羽の生えたことば』を話せるようになったことは、言いようのないほど有難かった。ことばを話すと、考えが喜びにあふれて飛び立っていく。」（同上）

会話、対話では、言葉が音となって、人の間を行き交います。そして、それぞれの人の思い、考え、行動までもダイナミックに変化させます。意識して、自分の考えをダイナミックに再構築するためには、そのためのスキルも必要になります。

本学も、様々な対話、相互作用を通じて、成長することができる大学でありたいと思っています。多くの方々のご理解、ご支援に感謝致します。